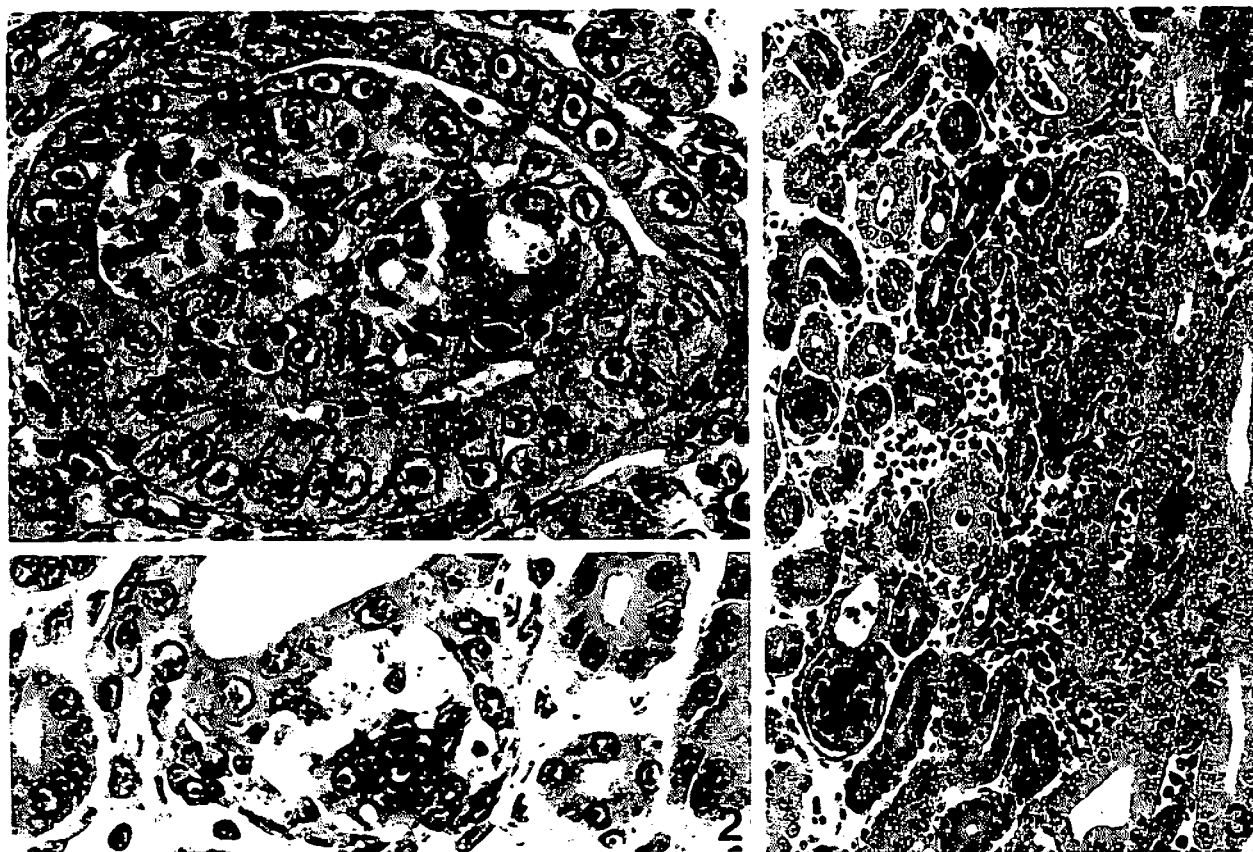


# 鶏の腎臓

家畜衛生試験場鶏病支場出題 第25回獣医病理学研修会標本No.436



動物：鶏，ブロイラー，雌，1週齢。

臨床的事項：1983年3月11日岐阜県内の某ブロイラー農場の1鶏群の4羽の病性鑑定を行った。4羽とも臨床的には異常を認めなかった。4羽とも直腸からトリピコルナウイルス（腎炎ウイルス）が分離された。4羽中1羽に腎臓の退色が肉眼的に認められたので、腎臓のみ組織学的検査を行った。

肉眼所見：腎臓の前，中，後葉とも全体的に退色していた。その他の臓器には肉眼的には著変は認められなかった。

組織学的所見：尿細管上皮の細胞質に硝子滴状物が時折見られた。このほか、尿細管上皮（特に集合細管）の腫大、増殖が見られ、管腔内へ突出する像がしばしば認められた。重度なものでは、管腔内は突出した尿細管上皮によって閉塞するものもあった（写真1）。まれに、尿細管に近接して多核巨細胞形成も認められた（写真2）。尿細管の腔内には、偽好酸球、リンパ球、蛋白性物質が認められた（写真3の矢印）。腎臓の間質では、単核細胞、リンパ球、形質細胞、偽好酸球が瀰漫性に浸潤していた（写真3）。間質の血管内にも多数の単核細胞、偽好酸球

が認められた。糸球体、尿管には病変は認められなかった。腎臓のホルマリジ固定材料を電子顕微鏡検索したが、病因因子と思われるものは観察されなかった。

I Bウイルスによる腎炎は主に3-7週齢の雛に発生し、尿細管上皮は変性、壊死を示し、尿細管腔内にしばしば球状の尿酸性結晶が見られ、痛風様結節も認められる。ピコルナウイルスは2週齢以下の雛に実験的に腎炎をつくり、ウイルス接種後3、4日で、尿細管上皮細胞における硝子滴変性が著明であり、その後間質におけるリンパ球浸潤、リンパ濾胞形成が認められるとされている。今回の症例は病変から代謝障害や中毒性の疾病は否定的であり、感染性因子によると思われる。鶏ピコルナウイルスが直腸から分離され、このウイルスによる腎炎が疑われたが、腎臓からのウイルス分離はなされておらず、電顕的にも病原体を確認できず、本症例の病因は不明であった。

病理組織学的診断：本症例は「鶏の尿細管腎炎」と診断された。しかし、しいて従来の腎炎の分類にあてはめると間質性腎炎となると思われる。